

ハロルド・ピンター 『こびとたち 小説』 (3)¹

細 川 眞

15

ヴァージニアは肘掛け椅子に座って、膝にグラスを置いていた。スプーンで茶葉のついた一切れのレモンをつつき、太陽が花瓶の中を動くのを見た。他の人々はお喋りをしていった。彼女は膝のところでスカートのしわを伸ばし、前屈みになって暖炉にグラスを置き、後ろにもたれ、目を閉じた。

おれたちの知識人と一般大衆達は？とピートは語っていた。やつらは四つのうちの一つをする。やつららはそれぞれ、自分たちを無視し、哀れみ、他の何かを意味するためやつらを改造するか、やつらについて不満を言う。もしおまえが最初のことをするなら、おまえは自分の視野を制限する阿呆となる。もし二番目のことをするなら、知識人ではない。もし三番目をするなら、時間を浪費していることになる。もし四番目を行えば、丁度おれのようなになるぜ。

大衆とは何だ？とマークは尋ねた。

ばか言うな。おまえは今まで、貧しく、踏みにじられて困窮し、一本の鎖につながれ、ぶちのめされた、おれたちに何をすべきかを教える多くのイエスについて聞いたことがないのか？

彼らは貸し切った車でただ動き回るだけだよ、とレンは言った。ぼくは彼らのうちの一人も一度も見たことがない。

マークはグラスの残りを飲み干した。

非常にいい紅茶だね、それ、ヴァージニア。

よかったわ。

いいかい、とレンが言った、どおってこともないがこんなことがあったよ。ぼくは先日仕事をしていて手洗いに行ったが、駅長が、偉そうなボスで城の王様だが、洗面台に屈み手を洗っていた、完璧な装いでだよ。ぼくは自分の目が信じられなかった。やつを見ながらぼくはそこに立っていて、そして、やつの尻をそのまま蹴り上げたい恐ろしい誘惑に駆られたよ。

したのか？マークが言った。

いいや。なぜだかわかる？ なぜかわからない？ もしぼくがそこで彼を蹴り、そしてそれから鏡を突き破ってやつを打ちのめしたなら、そいつが何をしたかわからないかい？ やつは振り返って、とても非常に申し訳ない、と言って手を拭いて行っ

てしまったらうよ。神のように。それは正に神ならすることだよ。それは理の当然だ。

そうだ、としばらくしてピートが言った、それは全て非常に結構、だが、おまえはこのような場所では自分の気持ちをしっかり押さえておかなければいけないぜ。おまえは装甲の出で立ちでなければならぬ。もしおれが男らしく振る舞い怒り出したなら、おれが言ったりしたりできることはたくさんあるぜ。しかし、要点は何だ？ おれは偶然出くわすチンピラの類いのやつと言い合いをするくらいなら、むしろおれの喉をかつ切る。勿論これらの連中にわかってないことは、おれの欠点を探る必要はないということだ。おれは開けっぴろげで公明正大だ。悪魔でさえ無鉄砲なことをしなくても覗けるぜ。

えっ？とマークが言った。

ヴァージニアはグラスを集めて台所へ持って行った。

確かに、とピートは言った、おれの一物にかけてこう言おう。他人を扱う技としては、一つには彼らを見抜くことができること、二つにはおまえの落とし穴を閉めたままにしておくことだ。もしおまえが第一のことに対して十分頭がよく、第二に対して十分統制できれば、おまえは成功確実な男だぜ。

彼女はグラスを洗って拭いて、そして食器棚においた。

クロッカー日和だね、とレンは言った、クロッカー日和だ。

公爵は来るのに長い時間かかると公爵夫人は言ったぜ、もう一方の手で紅茶をかき混ぜながら、マークは欠伸をした。

そうだな、とピートは言った、しかしロンドンには全く本当の天候というのではないぜ。ロンドンは四季を可能にしない。ロンドン是一切を含む有様だ。おれの意味わかるかい？

ヴァージニアは外の芝生の方に目をやった。

大事な点は、もちろん、とピートは言った、おれたちが生まれたのは空間の世界の中中でなくて、木の実の中へだ。おれたちの最善の者だって側面をこするだけだ。さあさあ、ヴァインブラット。最善を尽くせ、そしてしかめっ面をするがいい。おれは形而上学に取りかかっているんだ。

ヴァージニアは部屋に戻って来てそして腰を下ろした。

おれは発見したぜ、とマークが言った、尻に心が作ったものを見つける技を。

きみならそうやりかねないと思う、とレンは言った。

確かに、とピートは言った、この便所文化には限界がある。文字通りの便所係員であることは人生の唯一の目的ではない。例えば、イエス・キリストは他の方面で有能だった。

それは素晴らしい服だね、ヴァージニア、とレンが立ち上がって言った。

あなたは以前に見たことがなかった？

あった？

ピートが作ってくれたの。

そうだ、ぴったしだ、その服は、とピートが言った。

レンは屈んで、服の肩のところに指を触れた。

それは非常になめらかな生地だね。

卸売りか小売りか？ マークが尋ねた。

卸売りだよ。おれはある男を知っているの。

それではきみは小売りではいくらの？とレンは言った。

わたしは食べ頃ではないわ、とバージニアが言った。

マークス・アンド・スペンサーでは完全な生地一つ手に入らないのか？

その生地については運が良かったんだ、とピートは言った。今は別の服の仕事をしているぜ。

それは何？とマークが尋ねた。

ペチコートさ。

ピートとマークは、椅子からマッチの方に屈んで、タバコに火を付けた。

おまえはいつ仕事をやるつもりなんだ、マーク？

まだしばらくはしない。

どこで小遣いを得てる？ あきれたな。おまえはもう蓄えが足らなくなってるにちがいないが。

ハノーバー・スクウェアで公爵夫人を得たぜ。

年寄り、若いの？とヴァージニアが尋ねた。

そいつは寝たっきり。

おれは信じるぜ、ピートは言った。

実際のところ、とマークは言った、それがおれのところからの念願なんだ。それが唯一の方法さ。

甘い考えをもつなよ。おまえはヒモとしては役に立たないだろう、とピートは言った。ヒモは忠実で自分の運命に満足しなければいけない。おまえは調理場の女の後も追おうとするだろう、そしてそれはおまえの勘違いだろうぜ。ヒモになるには規律や献身の意識が必要だぜ。すべての商売にはそれぞれの倫理がある。ヒモはな、マーク、人生の最後まで絹のパンツで朽ち果てたい以外には何ら欲望を感じないもんだぜ。おまえは自分のケーキを得て、それを食べることができないんだ。

的を得ているぜ。

しかし腹を割れよ。今までの人生でまっとうな昼間の仕事をやったことがあるのか？

おまえは思い違いをしているぜ、なあ、とマークは言った。おれは仕事をしている時は奴隷以外の何でもない。奴隷だ。役者になってみるよ。バケツ一杯かせいでみる。レンは隠してためた金を持ってるぜ。おまえを地方巡業に連れて行くぜ。

いや結構だ。

いいじゃないか？ やつらはおまえを大事にするぜ。

一週間で死んでしまうぜ。はっきり言ってしまうと、おれはイギリスの演劇伝統のことを思い、それからおれの周りのそれを支えているホモやヒモの連中を見ると、おれは参ったとスポンジを投げ入れるぜ。

しかしおまえはリングの中にさえいない。おれはそれを我慢しなければいけない一人だった。

そうだ、おまえはそうだったと思う。

全くそのとおりだ。

タバコの煙がテーブルの上で混ざり、窓ガラスの方に流れていった。マークは脚を組んだ、テーブルがガタンと揺れ花の鉢が揺れた。彼は煙を細長く吐き出した。

面白いことが昨夜ぼくに起こったよ、とレンが言った。

何だ？

ぼくは幾らか数学をしてる間に、ちっぽけな虫を押しつぶしたんだ。そして親指で指から残骸をこすり落とした、そのことを考えもせず。それから気づいたんだ、その断片が綿のように大きくなっているのに。それらは落ちていく時、綿毛のように大きくなっていった。ぼくは死んだ鳥の体の中に手を突っ込んだことがある。

どんな数学をおまえはやってたんだい？とマークは尋ねた。

幾何学だよ。

答えがあるぜ。

いずれにせよ、とレンが言った、ぼくはそれによって決心したよ。来週パリへ行くことを決めたよ。

パリ？ ピートは言った。何のため？

何のためか言えないよ。

一人でかい？ マークが尋ねた。

いいや。ユーストンのやつと。オーストリア人だ。あちこち出かけるやつだよ。それは自由に参加できる招待なんだ。やつはそこに部屋を持ってる。

しかし何のためにパリへ行きたいんだ？とピートは尋ねた。

なぜ行っちゃだめなの？ ヴァージニアは言った。

きみはわかっていない、ギニー。おれたちはレンを気づかっているんだ。そうだよな、レン？

うん？

いいぜ、とピートが言った、もしそうしたいならおまえにはパリへ行く資格が十分あるさ。ただおれは自身そうしたくないということだ、それだけだ。おまえはそれを休暇だと見ていないと思うが。

そうだよ、思っていないよ。反対に、、、

おまえはここで別の仕事を得るつもりだと思ってたぜ。

往復切符を買うよ、とレンが言った。一時間以内に戻ってくるかもしれないからな。

わからないが。

じゃ、おれたちにハガキをくれよ、とマークが言った。

ヴァージニアが立ち上がって、服のしわを伸ばした。

庭を散歩しようと思うわ、と彼女は言った。

勿論、パリは決してぼくには大して意味を持ってなかったと認めるよ。

あなたの言おうとしていることはわかるわ。しかし先のことはわからないものよ。

きみと一緒に行くよ、とマークが言った。ライラックを見せて。

レンが見上げた。

一緒に行く？

おまえはいい。

全く本当のように聞こえないな、パリが、とピートは言った。

マークとヴァージニアは芝生の上を歩いて行った、そしてライラックのアーチの下で立ち止まった。

わたしはこの木が好き。

気をつけて、とマークは彼女の腕を掴んで言った。クモの巣だけ。

見えなかったわ。

それは美しい服だね。

ええ。

才能がいっぱいあるやつだな。

彼女は葉を一枚摘み、それを口に押し当てた。

そうね。

学校はどう？

いいわよ。

子供たちがまだ好きなのかい？

ええ、もちろんよ。

そして子供らもきみが好き？

そう思うわ。

腕が非常に日焼けしてるね？

わたしたち先日田舎に行ったの。子供達と私。ケントへ行ったのよ。

彼は大きな枝にもたれた。

そう？

むむ。

ところで、マリー・アクストンはどうしてる？

あなたのことを何とか忘れようとしたと、あなたに伝えてと言ってたわ。

かわいいな。

つらいことだったけど心は癒えた、とあの子は言っていた。

全く気の毒だった。

そう？

おれは望みのない愛を信じるよ。

本当？

いや、それはひどいことではない。それは無だ。

彼女はとげに沿って葉を裂いた。

あなた自身はこれからどうするの？と彼女は尋ねた。

これやあれや。

これや何？

風の吹く方向次第だよ。

どっちの方向に吹いていたの？

実際のところ覚えていない。きみはどうなんだ？

私？

そうだよ。

とても元気よ。中に入りましょう。

二人は芝生を歩いて戻っていった。

おれが言おうとしているのは、シェイクスピアは自身の正面ドアより更に遠くへ行く必要はなかったということだ。

しかしもし誰かが彼に切符をあげたら、彼はいらないと言っただろうか？

うん、おれはいらないと思う。

やつらはぼくを車で連れ出すかもしれない、とレンが言った。やつらはぼくを中に入れることさえしないかもしれない。

ええっと、おれは気にしないが、とピートは言った。おまえは今までには、多くの付け鼻をもっていたに違いない。

ぶらぶら歩くのはどうだい？とマークは言った。

そうだ、いい考えだ。

彼らは家から出て歩いた、そして道路を横切ってハックニー・ダウンズの方へ向かった。マークは新聞を買い、裏のページへめくっていった。

おれがここで手にした本の一つを見るか？とピートが、腕に抱いている何冊かの束となった本を指し示して、言った。非常に面白いんだ。エリザベス時代の外科処理についてだ。ある女がかつて6人の子犬を生んだのを知っているか？

全然！レンが言った。

ハットンエセックスとの試合で百点あげた、とマークが言った。

彼は近頃まともなこと何もできないね？とレンは言った。

その女はどのようそれに対応したんだい？とマークは言った。

ええと、これらの子犬についての要点は、とピートが言った、そいつは、貞節覆い

の下で豚の膀胱の中にそれらを入れていたということなんだ。

マークは壁の向こうに新聞を投げ捨てた。

くそ、頼むから！ ピートは金切り声を上げた、ヴァージニアの足に本を投げつけて、このいやな敷石の間を歩くのを止めてくれるかないか？ おまえのため気が狂いそうなんだ！

いやな人！ どういう意味？ いやな人！

殺すぞ、くそ売女、もし止めないなら。

二人の金切り声はね上がり、きしみ合った。ヴァージニアはあえいで彼の顔を凝視した。沈黙がざわざわした。振り向いて彼女はゆっくりと歩いて行った。ピートは本を拾った、そして彼、マークとレンは彼女の後へと続いた。

それでは、おまえが行く前にもし会えなかったら、レン、とピートが言った、パリでは体に気をつけろよ。

多分行く前に会えるよ。

そうだな。

彼らはダウンズの入り口に到着した。ヴァージニアは、彼らの前にいたが、木の下で立ち止まっていた。ピートは柵の側でちょっと止まった。

さよなら、それじゃ、と彼は言った。

うん、とマークが言った。

レンとマークは道路に沿って歩いて戻っていった。午後は静かで、彼らはヴァージニアがすすり泣いているのを聞いた。マークが振り返ると、彼女はピートの腕の中でうずくまっていた。彼は立ち止まってタバコに火を付け、注意深く吸った。彼は振り返ってみた。二人はゆっくりと並木道の下を草の方へ動いていた。彼は二人が原っぱを横切っていくのを見たが、やがて見えなくなった。

行くか

彼らはピクニックに出かけて行った。彼らにはピクニックの時間がある。彼らは庭を掃き、ネズミを制圧するのをぼくに任せた。彼らが、これらのこびとたちだが、離れるや否や、ネズミたちがやって来た。彼らはぼくにその家の世話をさせ、かれらの環境を快適にさせた。ぼくはいい仕事ができない。それは絶望的な課題だ。彼らが長く滞在すればするほど、その取り散らかしはますます大きくなった。誰も労をとろうとしない。だれもくそ、片付けようとする。彼らの屑が全て積み上がり、積み重ねが次々と混ざっていった。彼らがピクニックから戻る時、ぼくは彼らに、ぼくが片付けたんだ、ぼくは彼らが出かけて以来それにずっと精を出していたんだ、と言う。彼らは頷き、あくびをし、がつがつ食い、吐き出す。彼らは前と今との違いがわからない。実際のところ、ぼくは座り、足、皮膚、すじを動かす。ぼくは彼らに、ぼくは殉教者のようにあくせく働いたんだ、顔が黒く汚れるまで下女の仕事をしたんだ、と言う。チップはどうなったの

か、ボーナスの約束はどうなったのか、ちょっとした何かはどうなったのか、と言う。彼らはあくびをし、彼らは血が歯の間にこびりついているのを見せ、彼らはむしり取るゲームをし、彼らは厚切り肉を舌でなめ、彼らは網や、蜘蛛の巣状のものや、ばねのわなを持ち出し、彼らは罪のない獲物を化け物にし、彼らはむさぼり食う。無数の慰み。仕事はどうした？ 今の仕事はどうなんだ？ ぼくのあらん限りの献身の後。ぼくが処理したネズミはどうなんだ？ ぼくがきみたち達のために取っておき、むしり、そして干物にするため吊しておいたネズミはどうなんだ？ ぼくがきみ達を喜ばすためあらゆる方法で試みたネズミのステーキはどうなんだ？ 彼らはそれに触りもしない、見もしない。それはどこにある、彼らはそれを隠した、ぼくがもはや真っ直ぐ立てず倒れてしまう時まで、彼らはそれを隠している、彼らはそれから、すすけて、熟成して、つやがついた、堅いそれを持ち出し、そして勝利の料理としてそれを食べるだろう。

17

ピートは川の東の堤防沿いを歩いた。木材置き場の壁の下で彼は立ち止まり、凝視した。

牛の頭蓋骨。根付いた。いや。大きな巨礫。真鍮の鈍い塊、潰されて。

白い木の狭間胸壁が壁越しにしゃべる、鉄の枠で締められて。

鉄の手のひら、上を向いて、手かせをかけられて。

鉄樹のデスマスクが影となって水を覆う。

年取ったやつに一ペニー。

彼は一つの星にウインクをした。

一つだけこの移動。他は動かないまま。

木の先端がうなった、もろく、削りとられ、粉々になって。彼のかかどが砂利やちりをきしらせた。堅い石へ、橋の坂。橋の円丘部で彼は川と広い暗闇をじっと見つめた。集められ、丸められ、吐き出された。卵黄のような唾が平らになり、表面を打った時、白く音を立てた。

アブ界の王。膝に敵。

ああ。何かある虫が我が陣営の反逆者。

それを遠ざける。

彼の目は堤の大きな岩の頭をきらきら光らせた。

質屋の玉、赤い炎症を起こし。

彼は堤の道に降りて行き、しゃがみ、石の下の暗闇で手探りでかき回して捜し、それを泥からもぎ取った。甲虫が割れ目で跳ね回った。彼は石を揺らした。すさまじい音、水を一口。

三十シリングの罰金。

川は揺すぶられ、えぐられ、彼のブーツから落ちた。細長い目を通して、彼はカモメが切り進むように降下するのを見た。鳥は小石に止まり、泥の中で探そうと歩いていた。静かにピートは岸辺を動いた。カモメは死骸を引っ張った、口に足を入れ。ぱちんとネ

ズミの頭の皮が裂けた。くちばしがつつき、刺し通した。

デザート。チーズとビスケット。

彼の頭はドシンドシと歩き、彼は曲がって、橋を渡った。野原は見えなくなるまで暗く広がっていた。

押しつぶされた虫のように静まりかえっていた。

彼の鼓膜は音の覆いを突き、震動した。

じっと待て。

長いボートが、水の上で彼の方向に沿ってきびきびした動きを前に押し出し、彼を追い越して行った。橋の下に吸い込まれ、早い流れに逆らって漕がれた。寄せ波が小石と小競り合いし、後ろに戻そうと動いた。

選手たち。頑張り。本能の動物。ひざの論争。急いで。進め。

市場で舞い上がったゴミがパチパチとひびが入り、浮遊した。屋台が暗闇の中でよるい戸を閉めて、カチカチ言った。

汗がまだ流れている。競技場汗。これがそうか？

一直線を維持せよ。

夜の汗では、入れ替え機関車がエンジンをかけ、すぐ止まった。回転木馬の熱が彼の喉に縫うように進んだ。

このジプシーのドアをロックせよ。赦免を求めろ。

もう一方の出口を求めろ。

過剰な胆汁が彼の口の中に出てへとへとに疲れさせた。

これがそれだ。

重い足で歩いて、彼は閘門に到着した。川は運河になった。

膝は進もうとしない。産みの苦しみ。今度はガスの仕事。それを据えよ。

落ち着いて。待て。おまえはおれが、、、？

彼の手は鉄の手すりを断続的にドンドン打った。刺すような痛みが関節の中をのらくらしながら震えた。膝が屈み、彼はつかもうとして、しゃがみ、冷たく目を打った。

汚れを洗え、汚れを洗え。

彼は気力を奮い起こした。

こぶし

一撃で彼のうなじがぴしゃりと打たれた、彼の頭の上に冷たいしみがなぐり書きされた。

今

彼のまぶたはひとみをパタッと閉めた。

お父さん。

うん今やおまえは一人の大事な唯一の息子ただ開いた血の道唯一の夜そして測定されるためにテープを貼られた息子。何という息詰まるようなつば吐きそして装飾品間に合わせの草裂かれた草乗り手のいない木馬運河の回転あえぎながら。

シャボン玉を吹いておれは唯一のそう唯一の息子。やめろ後進。どちらともいえないアンモニアを用意せよ。おれの声彼の唯一のけなされた息子。すべてを鉄色へ黒く。それでこの錆。錆とそれ。さあ今やおまえは終え、一人の大事なそれを作った。裂けたナイフの長い柄緑の下黄色夜の刃固い皮と絹。運河の回転で。売女、顔が紫色になった。冷酷で精彩がなく。あの氷を鍛造するのに血で汚すハンマーをおれは鍛造する。

手仕事でなく。ガス仕事見張り台と甲板。そのようなおれの唯一の損失のために皿に八ガネをかぶせ。鏡よおまえはどのように砂までできる？ 目よ蠟で見抜け。そう言うため。いいえと言うため。ひっかけて交渉するためおれはおしゃべりするおれは今モップをかけられ。神とその漏洩。コカイン・キリスト。さあボルトだ。どちらが今ロックだ？ 本官チェック本官をチェックしろ噴出だ彼らと呼ば彼らと呼ばんでボルトがないのをチェックしろ。ガス小型発炎装置をさあ。そのようにリストに入れろ。鋼鉄の鋼鉄汗の流れはいと再びへの流れ。コンクリートの草が灰色のなしを出せ。値段なし付け値なし。入札なし、掲示板なし、チョークなし、販売なし、部屋なし、場所なし、サインなし、食べ物なし、冷たい檻、コールドール性の夏。

ひとりになるためにひとり。おれを粉々にせよ。視覚を閉じろ。そうあるようにテープを貼れ。完全にすべて。交互に。はしけ。年取っただらしのない女。熱い水。ただ存在している息子を見えなくせよ。取引はなし。金属のひび割れで閉じた店。そうしておれはそれまで知っている。それがすべて。おれはおまえの夜警か？ 全員乗船。さあ見るぞ。息抜き管。このちょうつがいねじ込み。それがそれだ。ばか話を続ける。そのように空気を。変えつづける。挨拶を。今空気を。さあ踏めさあ戻れ。動くはずだ。動くだろう。

18

レンは彼の足音が響く中、石の階段を登っていった。彼はバルコニーに沿って歩き、ドアのところで立ち止まった。それは少し開いていた。彼は中に入った。フラットの中は音がしなかった。玄関の広間は暗かった。明かりの裂け目が台所から輝いた。

ピート？

返事はなかった。レンは台所のドアまで歩いていき中を覗いた。ピートは窓の側の肘掛け椅子にワイシャツだけで、彼の方に顔を向けて真っ直ぐに座っていた。レンは部屋の中に入っていった。彼は手を化粧台に置き、親指でその端に触れた。

密偵だな、とピートは微笑みながら言った。

どういう意味だい？

それは別の問題さ、とピートは言った。ヨットのことを言っているんだぜ。彼は腕をゆっくりと椅子の肘掛けに動かした。

それらはとてもきれいだ。それらには均衡と調和がある。論理的な単一体だ。それ

はこの世界で探すべき唯一の物だぜ。論理。排水管における論理。葉における論理。彼の体が震えた。彼は椅子の肘掛けをつかんだ。

ヴァージニアは口紅をつけて、女友達と外出した。一日休暇だ。嬉しいぜ。あいつはすぐこわがる。それでおまえはここに？ 玄関前のマットを超えて、この部屋に入ってきた。おれはもう謎めいたこと言わないぜ。信じるのを停止するよ。やぶにらみだ。おまえがここにいるということを受け入れよう。おれはまえを破壊するつもりはない。いずれにせよおまえが誰でないかは知っている。それは極めて重要なことだ。いいや。おれが気が変だというのは正確ではないだろう。それどころか、おれの精神のねじは非常にきつく締めてあるので、そいつはおれの頭蓋骨の両側から互いに擦り合っている。それはおれが敬意を表する音楽だ。確かに。言ってもいいぜ、もしおまえが切迫した狂気の臭いを感じるとすれば、おまえはそのような災難と闘うのに十分な道徳的力を補充せざるを得ないと。おまえは正しいだろうぜ。しかし今晚はそうではない。おれは運河から家へちゃんと帰ってきたぜ。精神はその革の紐を放した。おれの指図なしで。それ自身の意志で行動した。おれはもはや責任をもってない。あるいはどの程度まで？ ここには何ら強迫観念はない、ただ悲しみだけ。おれはそれが腹立たしい。おまえはもう祈る必要はない。もしおまえがひざまついて祈るなら、おれにはひどい侮辱となるだろう。それは死者への祈りになるだろう。それはおまえへの不意打ちとなる。どうしておまえはおれを死体として見ることができようか？ 至極当然のことだ。おれはこれ以上ないほど潜在性のある生者だ。手ごわい勢力だと考えられているぜ。悪魔を手強いと考えそれ故彼を創造した諸勢力を相手にできる勢力だ。おまえの交渉はどうなった？ おまえはどこにいる？ おれの問題は、おれは根拠が確かだということ。それはおまえの知ったことじゃない。

ピートは右目をウインクした。

おれは一流クラブの会員のよう喋っている。白人女に。おれにはおまえがわからない。おまえは混沌と言ってもよい程に実体がない。あらゆるものには秩序だ。おれはおまえが知っている唯一の論理的単位。おまえが知らない方がいいもの。しかし勿論おれは距離をおくことができる。距離は造作ないこと。多分それはおれのためにおかれている。どこで距離は終わるのか？ おれは事実を回避できない、もっとも距離の事実を変更することは望ましいかもしれないと認めるが。愛は託児所では容易だ。そして生は巻き尺でただ維持される。もしそうだとすればそれが何だ？ 世界はこうした関連のない事柄をすすっている。物差しがなめくじかもしれないということは関連がないことだ。そして自尊心はグロテスクな関連のなさだ。それに敬意を表することは自殺になる。おまえはそれを知っていたか？ 少しずつ。最初に、おまえはまぶたを切り裂く。やっここで足指の爪をもぎ取る。残りが続く。そのような一連の出来事は波乱に富んでいるのを止める、それは方式、簡単な手続きになる。手順は自殺ということになったとき単純になる。おまえはまだここか？ 何故

なら自殺自体は関連のないことだからだ。室内用便器をひっくり返すことは、それと同様に建設的なことだ。おれは加わらないし、決してしないだろう。やつらの室内用便器においても、手順においても。おれがそれらの教典を書いたのさ。おれはやつらの前でやつらの教典を踏みつけた。おれは正式に放棄したい気持ちだ。おれの距離感が間違っているのが判明した時に。そしておれ以外の誰もそれを除去できない。おれは距離には展性があるとはっきりと示したときに、この剣を下におくだろう。それらが存在するということを証明するようになったら、そのとき剣を下におけ。おれが原理なので、おれは逃げない。結局、証明の行為に証明は存する。ガス室は、おれはそれを否定しないが、成熟した目的にかなった一式だ。おれは庭をのぞき込み、歩いているばちあたりどもを見る。冒涇は恐ろしいものだ。やつらは裸の女の体の上で子供の喉をかつ切る。血が彼女の背中を流れ落ち、血が彼女の尻臀部の間を流れる。おれの見える中で世界は神聖冒涇罪を犯す。おれは時間を都合するのを決めたら、自分の棺に歩いて行こう。やがておれはあの世界に墓石をおくだろう。臭気が現在のおれ自身の病気にあまりにも多すぎる病を付け加える。すべてのことが神に引き渡されなければならぬ、そして彼はその全責任を負うことができる。やがては、都合のよい時に。しかしおれは勿論問題を彼にゆだねよう。神は不合理だと言わないでおこう。おれはピンナップガールと同じくらいはっきりとおまえを目にする。世界は虚栄。世界は差し出がましい。おれは所属を止めなければいけない。おれ自身の胆汁はおれの口に置かれたおれ自身の胆汁。そしておれはウジ虫に令状を与えなければいけない。それは必要だった。おれの魂は古い、おれは世界では初心者だ。おれの徳はウジ虫どもに評価される。おれはやつらをおれ自身が指図する誰もいない国へ押し込んだ。おれはやつらの巣を突き止めて、それで手を打った。やつらはおれに頼って生活する連中だ。やつらはおれによってのみ存在する。おれが死ねばやつらは死ぬ。しかしおれがその場所を突き止めて以来、おれは信念から行動できる。おれには融通のきく余裕はある。多くの前線で展開できる。そしておれは本線の間人だ。それを疑っても何にもならない。おれはその道を離れない、いかに多くの膿が凝結しようとも。あらゆる良き魂にアーメン。おれは外れない。おれのすぐ上の権威はしかめっ面をするだろう。問題点がある。そのような行動はおれの生得権と一致しないことが判明するだろうということだ。おれは現在のおれではないだろう。おれには今おまえが見えるが、おまえはおれの存在する頭が見えるか？ その顔は罪がない多くの人を、頷いて祝福してきた。しかしおれはそれを、今、おれの首に感じるができるけれども、おまえがそれを見ることができるとは信じない。というのは、おれは、話すすべての言葉でおれの頭蓋に穴をあけるからだ。一つ一つの音節が消化管を窒息させる。一つの部屋の中に立って、おれはより広大な部屋の骨格に触る。滑稽なことは、おれは自分の考えには傲慢過ぎるということだ。しかしそれはすべて考慮済みだ、そしておれはそれを軽蔑し、そして均衡が得られるまでそれはなされるだろう、そしてそれからおれは条件

を提示する、そしておれ自身の秤がそれらを量るだろう。おれはおれ自身の救い主だ。世界中のすべてがそのことを知っている。今やそれはどうだ？ それは全く問題ない。全く結構だ。おれは子羊のように従順だ。そしておまえはまるで亡霊をみたかのように見えるぜ。

レンは化粧台から離れて行って、テーブルに腰をおろした。

何が必要だい？ ピートが言った。

何も。

ピートは前の方に座って、椅子から体を起こし始めた。

何がいる？ レンがパッと立ち上がって言った。

コップ一杯の水だ。

取ってくるよ、とレンは言って流しへ行った。

悪いな、とピートは言った。

彼はレンが蛇口をひねるのを見て、グラスをとってそして飲んだ。

礼を言うぜ。

レンはグラスを水切り板に置きそして座った。ピートは唇をなめた。

ここへ来た、と彼は尋ねた、おまえの目論見は何だ？

ぼくは立ち寄ろうと思っただけだよ。

ピートは目を閉じた。

今何時だ？

三時をちょっと過ぎた頃だよ。

そこのおれのジャケットの中に、タバコがあるだろう、とピートが言った。こちらに投げてくれないか？

レンはポケットを手探りし、タバコを取り出して、そしてそれを渡した。

マッチはあるよ、と彼は自分のポケットからマッチ箱を取り出して、呟いた、おまえが吸うとは知らなかったぜ。

吸わないよ。

これ以上持たないと思う。

ピートはタバコに火を付けて、そしてマッチを灰皿の中で燃やした。

おれは具合が悪いんだ、と彼は言った。

そう。

レンはマッチをポケットに入れた。

おれに欠けているものは何か、おまえは知っているかなと思う。

何なの？

何だと思う？

レンはしかめ面をして、頭を下に向けた。

わからないな。

おれには気力が欠けている、とピートは言った。

そうは思わないよ。

いや、気力がない。

きみがか？

おまえは思っではいけないぜ、とピートが言った、おれがおまえとマークは何なのかを知らない。おれはわかっているぜ。おまえたち二人のことを。

ぼくを？ マークを？ どういうことだい？ ぼくたちは何だって？

おまえたちはおれの友達だと思っている。

レンはしかめっ面をし、顎の下で手のひらをつかんだ。

そうだよ。

どうしておれに、とピートは言った、おれがヴァージニアを認めているかどうか尋ねないんだ？

何故きみにそんなことを尋ねる必要があるんだい？

もしおまえがもう一つ知りたいなら、話そう。おれは気力が欠けているので意地悪をする。おれはそれに囚われて苦しんでいる。あらゆる至る所で意地悪をしているんだ、そのイメージをものともせず。

彼はタバコを吸い込んだ。

そのためにおれがどうなっているかわかるか？

それによってきみは中国の教祖のシャマスになってる、とレンは言った。

全くその通りだ。

他に何がある？

そうだろうな。

レンはメガネを外しそして調べた。

外は今どんな様子だ？とピートが尋ねた。

もう暗いよ。

おまえは今までに中国の教祖に会ったことがあるのか？

うん。

どんなやつだ？

きみに似ているよ。

いいやおれはやつのシナゴークの用務係だぜ。

きみは中国の教祖でもあるよ。

違う。そこがおまえが間違っ所なんだ、とピートは言った。おれは違う。もしそう言っってよいなら、それはおまえの方のひどい思い違いだぜ。

うん、それはわかるよ。

そしてまたおれの方でもそうだった。

彼は立ち上がった。

空気。

どこへ行くんだい？ レンが尋ねた。

外へ。

二人はバルコニーまで歩いて行って、そこから身を乗り出した。レンはメガネをポケットの中に入れ、そして目をこすった。

ぼくの目は非常に悪い、と彼は言った。今メガネを外したが、見えるよ。

それはもっともだな。

月はそこに昇っていないかい？ もう遅いに違いない、とレンは言った。その明かりは見えるか、道路の？ それぐらいのことは。あれはベルだ。あの音がする。ぼくが立っているところで月が見える。申し分ない。地球は回っている。これは夜でない。これは夜でない。それは回っている地球だ。きみには月の音が聞こえるかい？ ええ？ そしてこれらの明かりは？ ここにベルがある。ぼくたちはこのベルを作っている。ぼくたちは明かりを作っている。月の音が聞こえるかい、音を通して？ それはぼくたちの中にあるんだ。

19

誰にもおれは弱みを握られていない、とマークは言った。厄介な奴はどこにいる？ きみは目星をつけられた男だよ、とレンが言った。

恐らく。ねらわれているが平気だ。

おまえは刑車に平気だろうか？ ピートは尋ねた。

まさか。

そうならあなたはすべてに平気というわけではないわね？ ヴァージニアが尋ねた。おれが言おうとしているのは、あらゆるものは災いだということだけだ、とマークは言った。その事実の事実の内におれが受け入れることができない項目がある。しかし、おれはそれらを受け入れることができないということを受け入れる。おれは受け入れることができないそれを受け入れる。おれはその中で行動する事実を受け入れる。言い換えればおれは陽気に続けるぜ。

そう聞いておれはありがたい、とピートは言った。しかし、他方、すべてが災いとは限らないぜ。少なくとも骨折りがいがあるような、ある種の偉業はあるぜ。

あるのか？

きみのおじさんはラビ長だったに違いないな、とレンは言った。

なぜ？

なぜだって？ きみはタムルード的言い振りに染まっているよ！

タムルードはいったい何をはぐらかせたというんだ？

どうしてぼくにわかる？ 今までそれ自体読んだことがないのに。

それ自体では、とピートは言った、そうだな。

そうなら、おまえはそう言う資格はあるぜ、とマークは言った。おまえは偏見を持ってはいない。おれもそれを読んだことがない。おれたちは二人とも十分客観的になれるんだ。

おれが意味するのは、幾つかの視点からおまえは自身が業績と呼ばれることすらありえると言うことさ、とピートは言った。

それは否定できないね。しかしおれはより大きな災いの中の業績にすぎないんだ、言い続けるが。

きみは今晚は非常に陽気だね、とレンは言った。

あなたは生活を楽しんでる？ ヴァージニアが言った。

身動きが取れないんだ、とマークは言った。しかしおれは尋ねないぜ。

おれたちが生きているのは滑稽な古い世界さ、とピートが言った。

彼らは座った。

今日は非常に元気そうに見えるね、ギニー、とレンは言った。

そう感じているわ。

いつもだよ、マークが言った。

あなたのご門の前に柳の何とかを建て、とピートは言った。

そしてお屋敷の中の苦しい立場さんによびかけましょう、とマークが言った。

それだ。

彼女はそれに何と答える？ マークが尋ねた。

オリヴィア？

そうだ。

あなたは大いに助けてくれそうね、とヴァージニアは言った。

一少し暗くなってきたわ。彼女はカップを集め台所へ持って行った。

拭くよ、とマークが言って、彼女の後について行った。

いつ向こうへ行くんだ、レン？ ピートが言った。

明日だよ。

ちょっと。二ポンドだけど。役に立つよ。

いや、いいよ。

取っとけよ。

うん。ありがとう。

おれ自身は旅に出ても構わないな、とピートは言った。

したらどう？

いつかな。しかしもっと先になるだろうさ。

マークは裏のドアを開け、フェンスの向こうにネコを追いだした。彼はライラックのアーチの中に石を投げた。彼女は彼を見た。彼女の前には、広い窓を通して、夏が一日の最後の光で部屋の中に傾いてきた。沈んでいく太陽がライラックの花のあたりで所在なさそうだった。

美しい夕暮れだ、と彼は言った。

本当に。

ふきんはどこ？

わたしにやらせて。あなたは戻って。

本当に？

ええ。

彼女は陶器のカップをすすいで、水切り板に置いた。彼女はそれから庭の中へと歩いて行った。木の太枝の下で、彼女は見上げた。並んだ暗緑色の枝々の間を空がふさいでいた、黄昏まえの光の針。彼女は絡まった雑草を通して、クモの巣状にぎっしりと葉で一杯の壁まで動いていった。空は家々に沿って平たく広がっていた。歩いて行く静寂さの中、薄暗がりがある彼女の周りに集まった。彼女の歩みが藪をざわつかせた。夕焼けで空の縁が斑になった。このその時世界は変化していく。軽く彼女は木の幹に触れ、震えて腕をぐっと握りしめた、赤が薄れていき、そして光。木陰が上部フェンスによって動いた。彼女は陰が前へ出てきた場所へ動いていった、黒い木の下、陰で閉ざされ、そしてじっと佇んだ。彼女は腕をフェンスで支えた、木が彼女の肘をひっかいた。彼女は顔を覆った。

ヴァージニア。

ピートがライラックアーチをくぐり抜け、草の上を歩いて来た。

何をしているんだ？

暗くなるのを見ていたの。

彼は彼女の背中を自分に引き寄せて、彼女の胸を抱きしめた。

ギニー

寒いわ。

彼は彼女を自分の方に向かせ、彼女を見た。

寒い？

ヴァージニアは彼の目の中をじっと見た。

ええ。

外で二人は何をやっているんだ？とマークは尋ねた。おれはハックニーに最高のベッドをもっていると二人に言うべきかな？

レンは答えなかった。

世間は驚きで一杯だけ、とマークは言った。

彼は本棚へ歩いて行った、そして本を二冊どしんと元に戻した。

ええと、と彼は言った、それは全くおまえがネクタイを結ぶそのものといった状態だけ。本が一冊ある。トマス・アクィナスだ。その一語も読んだことはない。それによっておれは暮らし向きがよくなったか、あるいは悪くなったか？

悪くなったさ。

マークは腰を下ろした。

おれは先日乞食に五ペンス投げてやった。

それが何を意味する？

その通りという意味。

その通りとは？

五ペンス分ということ、マークは言った。

きみは拘束をのがれようともがいているよ、とレンは言った。

拘束をのがれようともがいている？

そのようにみえるってこと。

どんな拘束？

ぼくはきみがのがれようとしていることを知っているだけだよ。

おまえは的を外れているぜ、と彼は言った。

ヴァージニアとピートが部屋に入ってきた。

おれたちは帰るぜ、と彼は言った。

うん。

わたしは夜になるのを見てたの、と彼女は言った。

非常によかったね、マークが言った。

ぼくはそうできない、レンは言った。

なぜできないの？ 彼女は尋ねた。

だめ、不可能だ。空を見ることができない。

時々奇跡をなすぜ、とピートは言った。

そこには何がある？ 最初は昼、それから夜。その通りだとして。

母なる自然？ ピートは言った。おまえは見方が偏っていると思うぜ。それでは、パリでは気をつけるよ、レン。

そうするよ。

楽しくね、ヴァージニアは言った。

ありがとう。

連絡くれよ、ピートは言った。

きっと。

またなピート、マークは言った。

うん、ご機嫌よう。

ご機嫌よう、ヴァージニアは言った。

ご機嫌よう、マークは言った。

ご機嫌よう、レンは言った。

得やすいものは失いやすい。彼らは気にしない、これらのこびとたち。当然のごとく。彼らは決して途方に暮れない、決して混乱しない。もっともちっぴけなもの、もっともきれいな小間物がやつらを養い、支える。今や、甲虫や小枝と関係がある新しいゲームがある。赤熱の石炭の燃えがらのロックガーデンがある。髪の毛は縮れ毛で首のところ

で油が付いている。いつもしゃがみ、屈み、カスタードソースにやつらの芯を浸している。家庭流が最善だ。

ぼくは陰の中で香気でふわりと漂っている。時々舐めるような炎が彼らの鼻孔をひどく痛める。彼らは泣きわめき、砂場へ慌てて走り、顔をひきつらし、よだれを流し、もぐもぐし、ペソをかき、ほじくり、それから局部の軟膏で互いの開口部を和らげる、そしてそれから、すべてなくなり、すべて忘れられ、彼らは、それぞれ仲間と浮かれ騒ぎ、鼻スプレー、香りのある洗浄器を取り出し、ジンジャービールとドーナツで夜を休む。

21

あなたは変わった子ね、ソーニアは言った。

おれが本当に？

ええ。

おまえのグラスをくれよ。

彼らは人混みの中、斜めに進んでテーブルへ行った。

どのようにおれは変わっている？ マークは言った。さあ、言ってみろ。

今わたしは彼女の髪を櫛ですき、彼女の指にマニキュアさえした。

おまえはやつを知らないのか？ ピートは言った。大きな色黒の男、向こうのカウンターの側の。

ええ知らないわ、とブレンダは言った。

ああ、そう、とピートが言った、やつはおれの非常に古い仲間だよ。

本当？

そうだよ、やつとはトルコ風呂であったんだ。以来二度目は行ってないが。飲み干せよ、そして踊ろう。

わかった、とマークは言った、認めるぜ。おれ非常に変わってる。

わたしは何かがわたしの隅で呻くのを聞いた、見ようと最善を尽くした。

おれは、そこから抜け出せないが、桁外れに変わってるぜ。

それは雌親南京虫で、わたしを食べにやって来た。

何組かの男女が這うように、壁に取り付けた明かりが交差する中ピートに合わせてと移動した。

ええっと、とピートは言った、これは全くの純然たる贅沢だ。おっと。このエレイ

ンはたくさん金を持ってるのか、えっ？

それはバクスターよ、とブレンダは言った。それは彼のフラットなの。

ああ、そうだった、忘れていた。こいつは内縁関係のやつだ。

なんて？

状況さ、とピートは言った。特定の時間に特定の場所で行われている特定のひとまとまりの情況。それにおける唯一の教訓は、おまえがいくら特別になってもなりすぎることはないということだ。

それはそうと、もしあなたが役者でなかったなら、あなたは何をしますの？

もし本当に知りたいなら、ちょっと座ろう。

私はあなたの踊り方が好きよ。

これは何だか知ってるか？と彼は言って、彼女を窓のところまで連れていった。それはセイヨウフウチョウボクだ。それだけではない。おれの人生でそれほど多くの香りを嗅いだことがないぜ。香りの戦い。束の間の慰め、などさ。ここで待ってる、飲み物をもってきてやるぜ。

ああ、あなたはあの年取った人を私のところに引っ張ってくるなんて考えないでね。どの年取ったやつだ？

あのように私の口を見ている、とソーニアは言った。そんなにひどく企まないでよ。おれが！

叫ばないで。

おれが企むなんて！ マークが言った。

まああなた怒ったわね。

怒ってあたりまえだろう？

わたしがあなたに肘鉄をくわしていると思っているのね。

思っている！ 思っている！ マークは顔をしかめた。おれは思う。おまえは思う。

やつは思う。

わからないな、飲み物を注ぎながらピートは言った。考えたことでおれはここにはまり込んだ。

そして、考えたからおまえはそこから脱出できることになったんだ。

怪しいな。

ーソーニア、ピート、とマークは言った。

どこにはまり込んだの、ソーニアは言った。

悪習さ、ピートは言った。

今やおれの魂の正にぴったりの習癖になったぜ、とマークは言った。

わたしはどんな女性の男をも町で得て、彼を立たせたり、彼を横たえたりできる。

マークはそれを最大限に活用している。
あなたもそうでしょう、とブレンダが言った。
クリスマスは年にただ1回しか来ない。

ピートって誰？

アパロマイン

あなたの一族のメンバー？。

メンバー？ やつは呪術医だよ。

あなたは何をしてるの？

絞首刑執行人さ。しかし秋に新しい選抜があるだろう。

本当？

そしてそれから、とマークは言った、誰にもわからないぜ。おれたちは全員新しい仕事を探しているかもしれない。

ねえ、とソーニアは言った、あなた踊らない？ でなきゃだれか踊る人を探すわよ。

わたしは、わたしが知っているということをおあなたが知っているということをおあなたが知っているということをお、知っている。

わかった、もしおまえが本当のことを知りたいというなら、おれは学生相手にケンブリッジ大学で文学研究をやっているんだ。

何て魅力的、とブレンダは言った、文学研究？ しかしあなたは何をしてるの？

してる？ ピートは言った。おれは古い写本を掘り起こし、そしておれの正直で立派な見解を言うんだ。

なんだって？

そうさ、掘り出す、掘り出す。ここだけの話だがーそしてこれは実際最高機密だがーおまえそれを漏らさないか？

うん本当に。何？

おれたちは墓を開けていい特別の許可を得てる。

お墓を？

ひつぎだ、とピートが言った。墓。やつらが、自分とともに持っていったものは決して知られていない。

エジプトのミイラのように。

その通り、とピートは言った。死体を見たことあるか？

マーク！ とエレインが呼んだ。

何だ？

彼は鋭く振り返って倒れた。踊っていた人々がさっと散った。ソーニア、二人の男

そしてエレインが手を貸して彼を立ち上がらせた。

大丈夫、大丈夫。

あなたは十才の子に見えたわ！ エレインが言った。違った、ねえあなた？

おれの名前を呼んだか？ マークは言った。

ええ。巻き毛の魅力的な男の名前は何かだった？ 私忘れたわ。

ピートだ。

彼は呪術医よ、ソーニアは言った。

私を治療してくれるかしら？

いいや、とピートは言った、ほとんど連中は座っていた。一組のピンセットで骨盤の骨を引っ張り上げなければならないんだ。大きなピンセットだ。汚れた指の跡は残せないぜ、いい。教会法だ。ところで、尻の下で、人が値踏みのできない写本だろと思うのは正にお金だよ。他方、ときどき彼らは男の手足の周りでそれらを縛ったが、肉は腐るのに時間をとらない、それでそれらを取り除くのはあまり問題ではないんだ。おれたちが行った一つの仕事、手書きのものは鎖によってその男の足首に固定されていた。おれたちはねじ回しでナットを外すために家に使いをやらなければならなかったぜ。飲み干せよ。おれが受けた一番大きな衝撃は、骸骨がおれの頭に崩れてきて、そしてほとんどおれの耳をかみ切った時だった。おれにはその時奇妙な感覚がしたぜ。おれは、自分が骸骨で、そしてそいつがおれにお休みのキスをしに来た長く行方不明だった叔父だったと思ったんだ。仲間がおれをぐいと引っ張り上げてくれたとき、おれは死者から生き返ったラザロのように感じたな。いままでそう感じたことがあったか？ いいや、ええと勿論、おまえは一度も墓の中に入ったことはない。それをやってみるべきだ。勤めるよ、本当に、おれが意味するのは、もしおまえが人生によって提供されるに違いないすべてを味わいたいならばということだが。ああ、わかった、おまえはいつかその中に入るんだったな？ 火葬されることがない限りは。あるいは海で溺れることがないなら。実を言うと、もしいいなら、おれはぺてんをやって、次の共同墓地の仕事に連れて行ってやるぜ。それはむだではないぜ。実際おまえは亡霊のように見える。それがおまえの魅力だ。死は悪賢い顧客だ。しかし完全に徳がないわけではない、おまえがその羽目になる時には。そうだ、おれの仕事は、概して言えば、面白くないことはないんだぜ。どう思う？

ああもうわたしは満足できない、もうわたしはここに不満だ。

ああ、くだらない、とエレインは言った、もちろんすばらしいパーティよ。邪魔するのは何？ バクスターは酔っぱらっているし。しかし私はパークへ行こうと思っている、売春で。本当よ。

おまえは問題なくやるだろうぜ、マークは言った。
彼女は座っている男の側でちょっと止まった。

ご機嫌いかが、ドン？

彼は立って彼女らに寄りかかった。

おまえは先週何回セックスしたんだ？ 彼は尋ねた。

あなたは絶対に、とエレインは、目を閉じてそして彼ら双方の方に揺れ動きながら、しゃがれ声で言った、決してその言葉を使ってはいけないわ。あなたは「疲れ切った」と言わなければ。それが女性にふさわしい唯一の言葉よ。

おれは言うことには気につけないんだよ、とドンは言った。おれの順番はいつだ？
もう来るわ、とエレインは目を細めて言った。あなたの順番はもうすぐよ。我慢して。先日の夜は医者二人だった。一つのベッドで。

売女め、ドンは言った。

一般医か？ マークが尋ねた。

それで、とピートが言った、職業はいっぱいある。おまえの職業は何だ？

あなた知ってるでしょ、とブレンダは彼の髪の毛を撫でつけながら言った。

おまえは演じてる。今まで女将オーヴァダンをやったことがあるか？

誰？

九人の夫がいた。すべてプラスチックでなされていた。錯覚照明。それはすべて古い光学の問題。おまえにはがそれあったか、なかったかだ。哲学は入ってこない。それは雨の天候に任せる。

わたしをあなたの大きなプラスベッドに置き、そして鮮紅色になるまで転がして。

おれは役者だ、とマークは言った、北北西の時だけ。風が南風の時には—
それで？ ソーニアは言った。

おれは売春婦と鶏の臓物の区別ぐらいはつくぜ。

あなたはシャンパン・グラスの泡のようにわたしを興奮させる。

目が見えなくなりそうだ、とマークは言った。窓を開けてくれないか？

おまえはこの場所に根をおろしているのか？ ピートは、飲み物を注ぎながら言った。

酒場があるところには、商売はあるわ。

今日は、とエレインが微笑んだ。私がおまえのホステスよ。

上出来のパーティだな。

どこでそのような縮れ毛を得たの？

神のなせる技だ。

この人は全く途方もない職業なのよ、とブレンダは、酒をすすりながら言った。
こいつは特別の川でマスを手探りで探すんだ、とマークは言って、椅子に崩れた。
あなたの巻き毛もらえる？ エレインは尋ねた。
著作権所有さ、とピートは言った。悪いな。

わたしは聖ジェームズ診療所へ行って、そこでわたしの赤ん坊を見た。

おまえはおれがしたことを彼女に言うつもりはないね？

何故？

言ったはずだぜ。それは極秘だ。窓の方へ行こう。失礼。

二人は座った。

見てみる、とピートは言った。やつらは煙の中。地獄が第三の仲間だ。この生活が好きかい？

私はあなたが好きよ、と彼女はささやき、彼にキスをした。

自分のことを考えるよ。窓の外を見てみる。ロンドンは仰向けにぼったり倒れている。それは笑いもの。今何時だ？

キスして。ねえ。

二階へ、とマークは呟いた。階下へ。二階へ。おれのご婦人の部屋で。おれのスイス人護衛兵はどこだ？

黙って！

誰が言った？

黙って、とエレインがドン腕にすがって言った。あなたは酔っ払って寂しげね。ありがとう。

わたしには意地が悪い、どうしてわたしにはそんなに意地が悪いの？

大事な点は、とピートが言った、女は女だ。それを忘れるのはよくない。

うん、よくない。

誤りだ、誤りだ、不承認だ。それは極刑にあたいする罪だ。やつらはおれを罪に問うのにおれに任せた。そしてまあ聞いてくれ。おれには弁解の余地がないんだ。

私は女よ、とブレンダは言った。

おまえが？ どうしてそんなこと言うのだ？

私が処女だとは思ってないんでしょ？

気をつけな、とピートは言った。一蓮托生だぜ。

そんなに多く飲まないで。

威厳だ！ 威厳だ！ 突然姿を現して、マークが言った。

座るか、立つかして。

いくら持っても持ちすぎることはないぜ、とマークは言って向きを変え去って行った。

ベイビー、ベイビー、あなたの大きく太った足をわたしから離して。それはあなたに楽しみを送っているかもしれないけれど、それによってわたしはこてんぱんにやっつけられているのよ。

こちらに来て、ソーニアは言った。

何？

ここへ。

ここ？

コーヒーがあるわよ。

これは台所だ、マークは言った。

飲んでよ。

非常に冴えている。誰が入れたんだ？

すすってみて。

ドアが開いて、男と女が突進してきた。

ゴミ箱はどこだ？

彼らはゴミ入れをつかんで、その中身を床にあけた。男がそれからゴミ箱を逆さに腿に締め付け、ドアの方によたよたと歩いて行き、女が彼の股間をつついた、トムトムと打ち鳴らし、玄関を横切って娯楽室へ入っていった。マークは卵の殻、ジャガイモの皮、ベーコンの皮の間を滑るように走ってソーニアの所に行き、彼女にキスをした。

おまえはおれを愛する前に、と彼は言った、足跡を全く残さずに、雪の中を走るようにしなければいけないぜ。

それを飲んで。

これはトルコの諺だ。

周りに集まって、男達！

エレインは椅子の上に跳び上がった、スカートを腰にたくし上げて。

私約束したでしょ！

彼女はうめき声を出し、音楽に合わせてのたかった、靴下留めがびんと張って。大勢がすっとなで来て、彼女の周りで床に歓声をあげた。部屋がどっかりと薄明かりに腰を降ろした、明かりは二つの壁のランプから低く、ひょいとかがんだ頭越しに彼女の脚に光を放った。

あなたたちにバレエよ、彼女はかすれた声で言った。

この角度からのあの子好き？

外へ行こう、ピートは言った。

さあ！

スカートが揺れて浮かんだ。

あああああ！

マークはまぶたの下でさざ波とシャッターのようなライトをぼかんと見た。エレインは下に降りた。壁のランプの側で彼女は体を揺すって、ブラウスをするっと脱いだ。

これは私のパーティよ。

あなた彼女好き？ 彼女を好きになりたい？ ソーニアが尋ねた。

これを捕って！

彼女のブラジャーが暗闇に飛んだ。

ねえ、あんた、わたしを、わたしをあなたの大きなプラスベッドに入れて。

彼女は壁の側で陰から光へと一人で踊った。かん高い笑い声が砕け、消えた。フロアのピート・タイム。彼女は自分の胸を愛撫した。彼女は、回転しながら手をブリーフから尻へと滑らせた。暗がりの中から一人が彼女を自分に引っ張った。二人は倒れた。マークはグラスを踏みつけて、カウンターの側でよろめいた。彼はソーニアをしっかりとつかんだ。二人は座った。ソファァーがくぼんだ。

わたしにブタの足とボトルのジンを頂戴、罪があるのでわたしを殺して。ジンで一杯だからわたしを殺して。

部屋はブーブー言い、ぴしゃりと音を立てた。ライトが多くのを横切って低く悲しい音をたてた。ああ！ エレインが叫んだ、私は死ぬわ。ああ、とマークは言った、確かに。バクスターは壁をたたいた。私を殺して私を殺して殺して殺して私の隅でうめきながらあなたは私を興奮させる私から地獄を打ち出して、私は知っているあなたが次のことを知っているということ、何故あなたはそこで私に一杯な脚を私から離して私のかわいこちゃんが私を転がすのを桜色のブタの脚が私を転がして赤くするのを見たかをどんな女の男も私に言おうとしていることを。

外へ。

マークは左右に揺れる姿の人々から部屋を進んだ、彼とソーニアはよろめいて赤い玄関に入っていった

さあ。

彼はドアを押した、彼らは中で閉じた。

さあ。

ベッドはくずれ落ちた。彼は引っ張った。

やあ、こんちくしょう。

ピートとマークは起き上がって、頭をかしげ、じっと見つめた。

ところで、マークは言った。

それで。

仕事はどうだい？

不平を言っておれないぜ。

少し窮屈だった、この安ダンスホールは。

本当すぎるな。

あまり効率がいい考えではないな、これ。

ソーニアは身を引き離して、ドアへ歩いて行った。

私を待って、ブレンダは言った。

ドアはボタンと鋭い音をたてた、青ざめた顔が暗闇の中ささやいた、赤いライトが暗闇を損ない、閉じた。

おまえはデモクラシーのため応分の務めを果たしているんだな？

おれの旗は半旗だけ、とピートは言った。おまえはどうだ？

おれは昔のようにはできなくなった。

ところで、ここから出てはどうだ？

そうだな、ここから出よう。

22

見て。月と黒い草叢。わたしはそれをかぎつけている。明るい日が終わった。わたしはゆっくりと死んでいき死ぬ、死んでゆっくりと死んでいく、そんなにも年をとっている。それがその特徴だ、紳士の皆さん。わたしは売春宿にいる。あの人はわたしを追い払おうとした。彼が望んだもの、彼が恐れたもの。ああ大体非常に当たっている。誰が？それは要点を外れている。それは、全く別の事だ、異なる、こう言おうか、主要な問題とは、一つの差し迫った悲しむべき難問とは。郊外の列車が人をそこへ連れて行く。わたしそれと気づいた。あらゆる事に恥辱を。わたしは売春婦。あの人は飲み騒ぎで放縦ではなかった。もうたくさんだった。わたしは手を引こう。何もかもあきらめる。それをなかったことにして。こっそりとわたしは生きた、こっそりとわたしは去ろう。新たな秩序。厳しい試練。大地は真っ暗。わたしのまぶたに暗黒。わたしは盲目。

そして今あなたがやって来た、今このときにもう時間だと、もはやそうではないとわかって。わたしはあなたの年齢で冷たくなっている。あなたはあの庭でわたしのところへやって来た。わたしはあなたにわたしは冷たいと言った。あなたはわたしが言ったことがわかった。わたしは娼婦。わたしは娼婦であってはいけない。わたしはあなたの元を去るだろう。

シェイクスピア！ ピートはテーブルにドシンとマグカップを置いて叫んだ。シェイクスピアって何だ？ 単なる賃仕事の劇作家。好色な目をした肉屋の子供。にもかかわらず彼は主張を通した。あのビールを飲むときおまえはどのように見えているかわかっているか？ すべてその吸盤が働いているイルカ。

その通り、とマークは言った。これらの連中が間違っているところは、彼に名前と番号を与えようとしているところにある。ときどき誰かが彼は下着の着替えを必要とすると結論を出す。やつらが理解していないことは、彼はあらゆる天候に備えた装いをしている、一マイル先でもその天候の匂いを感じることができるということだ。やつらは、自分らがもし彼に利益の何パーセントかを提供すれば彼はやつらの問題をうまく処理してくれると思っている。やつらは、彼が王の証拠を自分らの有利な方向に向けてくれると望んでいる。それは全く当て外れの仕事さ。彼は誰かの損失を、とりわけ彼自身のを決して縮小しようとしなかった。

正にその通り。

彼は針と糸で、とマークは言った、あるいは十日の治療で、せっせと仕事をしないぜ。いつ彼は傷を縫い合わせたり、作り直そうと試みるか？

おまえが言っていることは、彼は道徳的な詩人ではないということだ。

道徳的詩人？ もしおまえがそれによって、彼はもう一つではなくある種の栓の注文取りをしないということの意味するなら、彼はそうではないとおれはひどく確信する。もしおれがそう言ったなら、それならそれはおれが言っていることだ。飲み干せよ、そうすればおれたちは流しを密封する道徳的栓でもう一杯飲もう。おまえは道徳性によって何を意味するんだ？

いいか、とピートは言った。おれはこのことについておれ自身全くちょっとだけ考えごとをしていたんだ。おれのその見方はこうだ。おれたちが使う用語の道徳性というのはおまえの仲間たちに対する善の実践ではないか？ おれたちがただ社会的な生き物であるところでおれたちが執らなければならない責任。しかしそれは、ある場所のある時間におけるある状況の要求物に適した好都合なものにすぎないぜ。それは、全く役に立たないんだぜ、おれが言う意味がわかるか、どんな知的道徳にも近い、善と悪の問題を解決するのには。

どういうことだい？

つまりその、特定の行動の結果の熟慮によって善と悪が如何に明らかにされうるのかおれにはわからないということだ。善というのは、もしよければ、社会的徳と同様、精神の生産的状態だ。しかし、ある状況における精神の生産的状態は、他の状況では不毛なものになる。善と悪、それらは両方とも周囲の事情によって明確にされる。薬物のように、それらは恣意的でも静的でもない。

おまえのカップをくれ、マークは言った。

彼はカウンターまで歩いて行って、一番いいピターを二つ持って戻ってきた。

乾杯。

そこからハムレットを外せよ。彼は別の話だ。しかし他の者たち、オセロ、マクベスとリアは、その偉大な徳が正にその過剰性によって欠点に変えられる連中だ。おれの意味することがわかるか？ オセローは愛の過剰の故に嫉妬深い。しかしそれをよく見てみる。彼は、ただ彼の愛情が説明する必要性によって制約されていない限り、愛していた。リアの度量の大きさの極端さが地滑りを引き起こす。マクベスの真の問題は、妻をあまりにも重んじすぎたということだ。これらの連中の問題は、彼らは自身の領域の限界を認めるのを拒むということだ。彼らの感情は実際の出来事を超過している。彼らがやっていることといえば、資力を超えて生きているだけである。そして彼らは、自分の観念でなく信念に基づいて行動しなければならない時に、欠けているのが発見されるんだ。彼らは社会一般の正義によって釈明を求められる時、間違っている。勿論同時にやつらは正しい。彼らは、おれたちの賞賛と共感に従えば正しい。しかしそれは決して道徳的にやつらを見ることではないぜ。

おれたちは何に共感しているんだ？

おれたちは、彼らが行動の責任によって制約されていない時の彼らの姿に共鳴している。行動の必要性がやつらの徳を殺している。彼らは道徳的に考える創造物であることを止める。リア、マクベスそしてオセローはすべて、何らかの方法で、彼らが行うことを説明するのを強いられているのさ。そして彼らはすべてそれをし損ねる。リアとマクベスは企てることさえしない。

レジが煙の中パタンと閉まり、鳴った。

彼らが見ることができるのは、自分たちがその一部であることを止めた体系で作用している因果関係の自然の成り行きだけである。彼らは社会的徳の欠如によってこの体系から離れ落ちる。他人のために考えないことによって。それぞれの場合、他人のための最初の思考が、表面的で、そして実現されていず、妄想的だった。彼らの独特な特質が彼らに、そう言いたければ、他人への分配力を与えている。そのように彼らは考えた。ちょっと待って。要点は、いいか、要点は、あらゆる物は関連する状況によって制限されるように、そのように彼らは自分らを考慮に入れていない道徳体系に自分たちは責任がないと考えた。これらの変人たちが間違うところは、彼らが、好もうがそうでなかろうが、その一部のままである機構を征服しようとする事だ。その機構は、そう言いたければ、大多数の基準、すなわち道徳である。おれにはシェイクスピアは人間と機構の双方を正当化しているように思える。もし彼がそうしているなら、どうしてやつが道徳的詩人だと言えるのか？とマークは言った、おれが言うのは、やつがやっていることを見てみる。やつは振る舞い方を見てみる。やつは決して非常通報索、あるいは救命帯を使わない、そして更にもっと、やつは決して示唆していないぞ、おまえややつの使用にすぐ使えるそれを手にしていたということ。

そうだ。

いかに多くの方向にやつが同時に旅するかを人が考える時、どのように道徳的判断が適用されえようか？ やつはたくさん問題をかかえていないか？ やつがすることを見てみる。やつは戻ってくる自分に出会う、やつは落ち込んで立てない、やつは成り行きを忘れる、やつは自制心を失う、やつは幾何学に頼る、やつは行き止まりの路地にそれる、やつは自業自得で苦しむ、そしてやつはほとんどいつもあらゆる手を失って終わる。しかし布地は、おい、破れないぜ。危険をはらんだ状況は、釣り合いがとれて張り詰めていないことはない。やつは仕事に閉じこもる。そういう理由だからだよ、そしてもしやつが道徳的判断をし始めたなら、やつは他の人々のように破綻をきたすだろう。

シェイクスピアについての大事な点は、とピートは、テーブルをこぶしでたたきながら言った、彼は観念を背景として人を評価しない、そして人にその結論への信頼できる情報を与えない、ということだ。

やつは賭博師ではなかった。

彼はむきだしだった、それだけだ。おれは、彼が善悪を抽象として見たと言う者にはどんな奴でも挑むだろう。彼はそうでなかった。おれたち自身の道徳感は、こんな程度のものだが、これらを行っている間に消滅されていきそうである、と認めていた。そしてもし人がその忘却を悪と取るならば、シェイクスピアを不道徳な詩人と呼ぶことができる。しかし他方、経験がおれたち自身の道徳を骨抜きにする一方で、おれたちは全用件を評価する幾つかの基準を保有しなければならない。もしおれたちが評価の条件を何も持っていないならば、経験は失われることになるだろう。というと？

起こることは代わりの基準だ。おれたちは、公衆の、つまり庭園の道徳—互いに生きる人々の同意に基づいた社会宗教的伝統—の代わりに、自分自身の無意識の裁き人としての人間という単純な事実を持っている、なぜならえり抜きの人間として、人は最終的に自分の行動への責任を受け入れなければならないからだ。それなら彼は、それを指摘している限りにおいて、道徳的詩人だと言うことができるぜ。

ああ、それでおれたちは今どこにいるんだ？

出発した所に戻ったんだ。

それはどこだい？

酒盛りに戻ったのさ、とピートは言った。おれがしらふの時に来いよ。すべては未解決でそんなに一杯なので、それでおれはむしゃくしゃするぜ。

何を飲む？

もう一度同じの。

ピートは、込み合っている、黒い木目塗りで鏡の付いたカウンターを見渡した。赤いスカーフをした女の頭越しに、彼は鏡に自分の顔をちらと見た、今移動する人影で見えなくなり煙がかすめたが、今捕まえた。自身を水平に見ながら、彼はマッチとタバコの

箱を手探りで探し、タバコに火を付けた。

ところで、とマークはテーブルにマグカップを置きながら言った、このパブは今晚天の怒りに気づいている。

そのとおり、とピートは言った、死天使が通り過ぎていったぜ。

やつはこの家で一人捕まえたか？ 乾杯。

おまえは何かわかっているか、マーク？ 健康を祝して。おまえの問題は何かわかっているか？

それは何だ？

おまえは神話になりたがっている。

神話は人によってそれになされるものだ。

それに取り組む正しい方法を教えようか？

信頼できる情報か、え？

おれに従え。我こそは道であり真理である。我こそは復活であり再生である。

おまえを信じるぜ。

それは絶対的真理だ、とピートは言った。おれが生まれた時、人々はおれが書き込む用紙を持って戸口の上がり段で待っていた。おれは二つの条件でその職務を受け入れると言った。

それらは何だ？

第一に、おれは自由裁量権を持たなければいけないということ。おれはおれ自身の時間で、おれのレポートを提出したい。

彼らはそれに対し何て言った？

即答をおれにしたくなかった。そして以来ずっとやつらはおれの計画をぶち壊してきた。

それは詐欺だな、とマークは言った。第二の条件は何だった？

おれは立派なユダが欲しかった。

えっ？

どう？ おれは、すべてが言ってなされた時、全く申し分のないだれにも会ったことがないんだ。

いつ全てが言ってなされたんだ？

神が最後の言葉を言う。

何、おまえに対してか？ おれは信じないぞ。

神だ！ ピートは言った。いいかよく聞けよ！ やつの愚かさはやつ自身の不運だ。

もし、おれが、やつが入った穴からやつを引き出すためにやつが持った唯一の希望だと、やつがわからなかったなら、それならやつはおれの軽蔑以外には他に何も値しないぜ。

彼はカウンターまで歩いていった。マークは、人々の顔と肩の間で、鏡に写った彼自身の顔をちらと見た。彼は自分のしかめつらを消すことに集中し、そして彼の額が揺れ、

なめらかになったのを見た。

肘に気をつけるよ。

彼らはおまえの地位にふさわしいような敬意のしるしをおまえに惜しげなく与えたか？とマークは尋ねた。

地位？

主の副官だ。えっ、ちょっと待って、おまえは聖霊に違いない。

聖霊よ立て、とピートは言って腰を下ろした。いや、事の真相は、もしおまえが実際知りたいなら、それについてはすべておれは終わったということだ。それは戯れだった。いいかい。おれはかつて自分は天才だと思っていた。おれはそうではない。おれは見本だ。それは秘密だ。しかしおれは、おまえ、一番上の棚からおれ自身を外す覚悟はできているぜ。おれはあっという間におれの姿を見失う。おれの市場価格は下がっている。しかしおれは人間らしく自説を誤りと認める覚悟はあるんだ。要点は、おれは自分を支えるための生計が欠けているということだ。そうだ。そしてもう一つ、ついでに。おれは過去におまえについて二、三失礼な事を言ったことがある。そしておれはそれらを取り消さない。しかし真実はすべてのこと。おまえに欠点があるからといって、おまえの徳に少しも真実さが少なくなることはない。おれには少しの欠点もないぜ、とマークは言った。おれは固有性と特性からできている。何も道徳的に非難すべき点はない。おれには欠点は全くない。

おいおい。おまえはそのようなことを言っても顔からニキビをすべて洗い流すことはできないぜ。顔を洗いなくすことはあるかもしれないが。おまえのような変人は顔なしで何をなせるだろうか？

大丈夫さ。

彼はカウンターまでよろめきながら進み、そしてダブルのウイスキーを二杯持って戻ってきた。

やあ、やあ。

制限なしでだ、とマークは言った。

ええと、誰のために乾杯する？

ヴァージニアに乾杯しよう。

その通り。

どんな風に？

簡素に、とピートは言った。大いに地味に。

ヴァージニアに。

教科書のような乾杯だな。

なんだって、おまえはどう思う？

思う？

何か変更は？

いや、それでいい。

わかった。
彼らはグラスを持ち上げた。
あれは正しい乾杯だと思うが、違うか？
模範的な乾杯だ、マークは言った。
その通り。
おれたちはレンにも乾杯しなければ。
ビールでそうできるぜ、ピートが言った。
もちろん。
最初にこれをやろう。
わかった。
オーケー。
ちょっと待って、とマークは言った。グラスを合わさないか？
いいや。それは手が込みすぎだ。
それはそうだ。
用意はいいか？
おお。
彼らはグラスをも持ち上げた。
ヴァージニアに。
ヴァージニアに。
上等のウイスキーだ、ピートは言った。
今度はレンのため。
うん。
ただレンにとだけ言えないぜ。
言えない、的を射ている。
それは全然良くない。
わかった、ピートが言った。
何？
ヴァインブラットにだ。
十分いいぞ。
彼らはマグカップを持ち上げた。
ヴァインブラットに
ヴァインブラットに。
やつは今何をしているかしらと思うよ、マークは言った。
多分凱旋門の頂上に座って、笛をふいているぜ。
おまえは今自分がどこにいるかわかるか？
どこだ？
文学的ロンドンの中心だ。文化のつぼみ。

全ての情熱を燃やして。それは全く大きな想定。

おれはビールでできている。

そしてちょっといいか、とピートは言った。空間は純粋な知覚。そして時間は形式的状態以外の何でもない。

ピート、とマークは言った、おれが朝目覚めるときあらゆる類いのものがおれの顔をじっと見るんだ。本当だぜ。

そういう訳で、おまえは「いいえ」を答えにできないんだな。

「いいえ」は全く答ではない、それはいつも「はい」なので。「いいえ」は全くないのだ。「いいえ」は無だ、そしておまえが無である時、疑問の余地はない。「いいえ」としての「ノー」は無。それで話は決まった。そうでなかったなら、それらはある必要はない、そうした「ノー」は全くない。

おれは雷神に撃つと言うつもりはない、とピートは言った。それは彼の誤りだ。

彼は落とされなければならない轟く音を落としていた。

それは落とされなければならないんだ、とピートは言った。

彼はマグカップに手を伸ばし、そして立ち上がり、やがてニパイントを持ってカウンターから戻ってきた。

おまえはその点で全く正しいぜ、マック。それは落とされなければならない。

おれたちはもう十八ホールに届いたか？

おまえは水壕近くだぜ。

ちょっと、とマークは言った、来年のおれの申し込みを取り消してくれないか？

おれは辞めるつもりだ。

カウンターに詩人がいたぜ、ピートが言った。

やつはおまえについておれに何て言った？

彼はおれに彼は誰だか知っているかと尋ねたぜ。

それで？

やつに彼はそのように見えないと言ってやった。

全くその通りさ。

ラビは愛人とベッドにいたんだぜ、とピートは言った、彼の女主人がドアをノックしたときに。彼は飛び出してベッドの下に隠れたが、自分の山高帽を女の両足の間に残していた。女主人は入ってきた。「ああ助けて」、と彼女は言った。「ラビは中に消えた。」

彼らはテーブルに崩れ落ちた。

なぜおまえはイディッシュ語が話せるのだ？とマークは尋ねた。ここにいるユダヤ人は誰だ、おれかおまえか？

それは体制だ、とピートは言った。このパブに美しい女がいるのを知っているか？毎回だよ。ヴァージニアはどこにいるんだ？

家にいるぜ。

家に？

自分の家だ。

そこが肝心だ。

そうだ、そんなもんだ。おれは幻覚を起こし始めている。

幻覚を起こす？ それはおれ以上だな。

おれはある問題を、偽りの、おまえ、仮説を克服して大きく前進しているんだ。

おれに尋ねるなよ、とマークは言った、全体の事柄について。誰もわかっていないことは

それは構わない。

いや、誰もそれをわかっていないんだ。

今後どうなるかはわからないものだ。

おれはどちらでもよいと思う、とマークは言った。すべてこの空きスペースは一体何だ？

店じまいだぜ。

それは全く釣り合いを失っているぞ。おれは腹藏なく言うぜ。おれが洗いざらい言う、やつらはおれを独断だと責める。

やつらはそのことを夢にも思わないだろう。

何のことだ、独断のことか？

おまえ立ち上がれ。

警戒しろ、歩哨。

さあ。

立て。

彼らはオックスフォード・ストリートから幾つか道路を横切ってグレイブ・ストリートまで歩いた。マークはバスの停留所をぐいとつかんだ。

誰が頭をすっぽり包んだ王妃を見たのか？

彼女は地下鉄に乗った、とピートは言った。

バスの中でマークはもたれかかって眠った。ピートは池のところで彼を手伝って降ろした。彼ら通りの真ん中を動いていった。

しっかりとつかまれ、とピートは言った。

おれには残忍な理由がある！

おまえは選ばれたんだ。鍵はどこにある？

彼らは転がるように玄関に入った。

ピート、とマークは言った、始まりは気がつかれることはない。

ピートは寝室のドアを押して開け、電気を付けた。彼らは中へ倒れた。

脱がしてくれ。

ゴンチャロフによる『オブローモフ』。

ピートは床に座って、マークの脚を持ち上げて靴を引き抜いた。

イヴァン・イヴァノヴィッチは、とマークはよろめいた、ピストル自殺した。

シャツを着たまま、マークはシーツの下に這っていった。ピートは、ベッドに座り込んで、彼をじっと見た。

ピート！

うん。

疑う余地はない。

全くないぜ、ピートは言った。

24

おれは亡霊を見たことがある。

何？ マークは振り返った。

彼らは夕方早くスワン・カフェで座っていた。カウンターの後ろで母親と娘がイタリア語で喋って、窓からアイスクリームを売っていた。

あれはレンではないか、丁度車にぶつかりそうになって？

信じられない。

レンは二台のバスと家具運搬車の間を進み、歩道に着いて、ドアから中をじっと見た。

おれたちはおまえだと認めたくないぜ、マークは言った。

彼は微笑んでテーブルまで歩いてきた。

メリー・クリスマス。

おまえは新しい土地を作り出そうと考えているんだとおれは思ったぜ、とピートが言った。パリはどうしたんだい？

離れてきた、とレンは腰をおろして言った。二日前に戻って来たばかりだ。

二日前？ マークは言った。何をしていたんだ？

健康を回復していた。

まるで十二カ国の警察がおまえを追っているかのように見えるぜ、とピートは言った。何故離れたんだ？

レンは彼らを見た。

調子はどう？

元気だ、とマークは言った。何故離れてきたんだ？

何故去ってきたかだって？ ぼくが去った理由は一つしかないよ。言っても構わない。いいよ、言おう。

それで？ ピートは言った。

それはチーズのせいだった。

チーズ？

チーズだ。腐りかけたカマンベールチーズ。それにはついにぼくも閉口した。それは全て出た、いいかい、約二十八回の用便で。ぼくの体温は最高で五百度だった、

オーバーでなく。震えを止めることができなかつたんだ、そしてしゃがむのをやめることができなかつた。それは間違いなくぼくを襲った。それはいつも結局人を襲う。それがどんなかわかるか？ 誰かがボールを打つ、きみはそれをひつつかむ、するとそれはきみの目を直撃する、つまりこの場合は腹だが。今は大丈夫なんだ。今は一日に三回だけ行く。多少ともそれを加減できる。朝に一度。昼食前に急行。お茶の後さらに急ぎ突進、そしてそれから自由にしたいことをする。きみたち二人には理解できると思わないよ。カマンベールチーズの厄介なところは、いい、それは死なないということ。実際、それは人がそれを飲み込むときに、ただ生き始める。少なくとも、このカマンベールに限っては。そこで知り合いになったドイツ人は、よくベッドにそれを持ち込んでいた。もっとも彼は達人だった、本当だよ。そいつはそれを完全に理解していたのだな、えっ？ マークは言った。

きみの言う通りさ。彼はそれを完全に把握していた。彼はそれ、チーズを残忍によく扱っていた。彼はそれによくぱくついた、実際それをぱくつき、それから全力を注ぐ。汗が鼻によく出ていたが、彼はいつも勝っていた。ぼくは彼が他の何かを食べるのを見たことはなかつたよ、時々トマト一個とマッシュルーム一、二個を除いては。こう言うのは嫌だが、彼の小便は旧約聖書のラビたちよりも悪臭を放ってたよ。

おまえは一週間以上パリにいたんだ、とピートが言った。他に何があった？ 覚えていないよ、とレンは言った。それが他のこと全てを消してしまったよ。パリのことを考えるといつでも、ただチーズのことを思うよ。

ほら、とマークは言った。頼むぜ。他にどんなことがあったんだ？ 何故パリを離れたんだ？

レンは頭を振って、微笑んだ。

いいや、と彼は言った。それはあのチーズだよ、それだけさ。それはチーズだった。

25

彼女はドアを開けた。

ああ。

暖かくない？

こっちへこいよ、ピートは言った。

彼女はソファの彼の側に座った、そして彼は彼女の膝の上に頭を置いた。

誰かが今日使っているトイレにごみを詰まらせた、と彼はウインクした。排水管を塞いだんだ。おれはちょっとの間疑われたよ。しかしやつらは間違ってた。問題を外れていた。おれには働くのに他の方法があるさ。

彼女は彼の額を撫でた。

あなたは一生懸命働きすぎよ。

労働社会だよ。

彼はソファの肘掛けに脚を移した。

きみの調子はどう？

いいわよ。

おれは帰宅途中図書館にひょいに入った、と彼は言った。まるまる一時間、犬、馬、人類学、心理学、詩の作品、エンジン、救命艇担当員のなり方、そして狼人間の内幕物に関する本を次々に通読していった。きみは狼人間になったことがあるか？

どうしたらわかるの？

吸血コウモリか？

あなたにはいると思うわ。

おれに？ おれは清い生活を送っている男だよ。

影が部屋をさまよった。

レンが戻ってきたよ。

レン？ それは早いわね。

彼は何かを秘密にしている。なぜ、なにが、なにか、を言おうとしない。

あの人にはいつもこの秘密主義、この妙なものはあるわ、と彼女は言った。

妙なもの？

あなたには決してなぜ、なにが、なにか、はわからないわ。

ああ、おれにはわからない。

それは混乱よ、彼女は言った。私は思わないー

何を？

全ての人がそのように生きる必要があるとは思わないわ。

全く必要はない、全く。

ないわ。

おれの誕生日に何を買ってくれるつもり？

ああそうね、何が欲しい？

本が欲しい、と彼は言った。おれを啓発してくれる装丁のいい本が欲しい。長い文章でなく。大きな活字。

わかったわ。

えっ、おれは考えていたんだ。きみはいつもおれのことを夢に見るかい？

そうだと知っているでしょう。

それを終わりにすべきだけ

すべきなの？

彼女は彼の顔を見下ろして、頭を窓の方に向けた。

ピート。

うん？

あなたに求めたいことがあるの。

うーむ？

休息が必要なの。

何だって？

休息がいるの。

休息？

そう。

どういう意味だい？

私はくたくたに疲れているの。

彼は起き上がって、向きを変えて彼女に顔を向けた。

私は休養がいるの。私には休息が必要なの。

彼は立ち上がった。

休息？

ええ。

きみは何のことを話しているんだ？

彼女はじっと座っていた。

何から休息？

…から。

何から？

私たち。

ピートは頭の後ろをかいた。

なぜ？ どうしたの？

私、疲れたの。

きみが？

彼は窓のところまで歩いて行って、外を見た。

少しの間だけ。

どれくらい？

ただ一約二週間。

いつでも、全く精力的だったわけでもなかった、ね？

ええ。

それで？

しかし私は疲れたの。

二週間でどうしたいの？

何も。

きみの顔が見えない。

見えない？

この明かりで見えないんだ。おれを見て。

私は。

おれが見える？

ええ。窓で白く。

おれの服を着てるね。

そうよ。

そうする必要はなかったぜ。

どういう意味？

彼はタバコに火を付けて、微笑んだ。

オーケー、ギニー。本に記憶しておくよ。ブラックリスト帳でなく、貴紳録。

マッチは差し迫る暗闇の中でゆっくり燃えた。彼はそれが指まで迫るのを見て、開けた窓から燃え殻のじくを鋭く回した。外では、夜は真っ暗だった。

おれたちはエスキモーの世界にいると誰でも思うだろうな、と彼は言った。死骸を切り分けることができないうちに、夜は真っ黒になる。

彼は振り返った。彼女は彼を見ていた。

オーケー。きみは休息を欲しい。取り給え。幸運を祈るよ。

ありがとう。

二週間。心配するな。おれは吸血コウモリのように飛んできみの窓に入っていかないから。今はおれが血を吸う時期ではない。

彼女は窓のところの彼まで歩いて行き、彼の腕に触った。

いいや、おれにキスしないでくれ。それはいらない。

注 1 テキストは、Harold Pinter, *The Dwarfs: A Novel* (London: Faber and Faber, 1990) を使用した。